みなとまち
VISION BOOK
2019−2024

港まちづくり協議会

MINNATOMACHI VISION BOOK 2019-2024

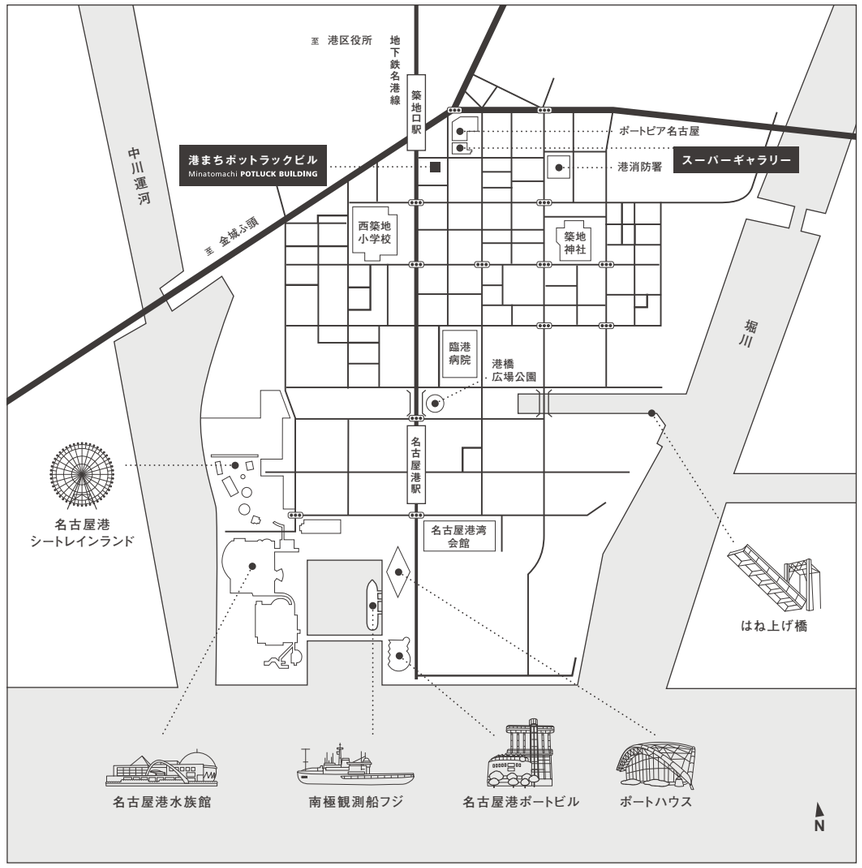
港まちづくり協議会

〒455-0037名古屋市港区名港1-19-23 Minatomachi POTLUCK BUILDING
TEL｜052-654-8911 FAX｜052-654-8912
E-MAIL｜info@minnatomachi.jp WEB｜www.minnatomachi.jp
Facebook｜@nagoyano.minnatomachi Twitter｜@minnatomachi Instagram｜potluck.paper2017

みなとまち
VISION BOOK

2019−2024

港まちエリアマップ



はじめに

港まちづくり協議会が「み（ん）なとまちVISION BOOK」を刊行したのは、2013年（平成25）3月のことでした。そこでは、「なごやのみ（ん）なとまち」というキャッチフレーズをコンセプトに掲げ、その構想を実現する各種のまちづくり事業として、「暮らす、集う、創る」の3つをテーマとした9つのシナリオを描きました。

目標年次であった2018年（平成30）を迎え、これまでの活動を振り返ると、Minatomachi POTLUCK BUILDING（港まちポットラックビル）という新たな拠点の誕生、アートやデザインの力を活用したクリエイティブな活動、港まちを舞台にした音楽とアートのフェスティバルであるアッセンブリッジ・ナゴヤを名古屋市と連携して継続的に開催するなど、地域外からも様々な人々が集結する魅力的な出来事が数多く繰り広げられてきました。それらは、当時描かれたシナリオの斜め上を行く素晴らしい成果と言えるのかもしれません。

しかし、同時に港まちの中では、まだまだこうした活動がきちんと周知、理解されていないなどの課題も見られます。また社会問題として注目される少子高齢化、地域商業やコミュニティの衰退化は港まちにとっても切実な課題です。私たちはそうした社会状況を鑑みて、2018年（平成30）度の1年を通し、次の5年間を展望するビジョンを描きました。このビジョンを新たな羅針盤として、港まちを益々魅力的な「なごやのみ（ん）なとまち」にしていけたらと願います。

港まちづくり協議会

ごあいさつ

港まちづくり協議会が発足して早くも10年を越える歳月が過ぎました。協議会はこれまでにも、防災、子育て、にぎわいづくりなど、多方面にわたる地域課題と向き合いながら、様々な取り組みを行って参りました。近年では、ようやく地域の中にも知られる存在になり、この活動への期待の高まりも感じています。しかしながら、空き店舗の増加、中心商業施設の撤退等、地域の衰退化は激しさを増すばかり。私が知る限りでも、おそらく今が一番苦しい状況を迎えているのは確かです。しかしだからこそ、「ピンチはチャンス！」。この局面を、皆さんのお力をお借りして、なんとかして乗り切りたいと気持ちを新たにしています。名古屋の港まちは、全国から人々が集まり力を合わせて築いてきた歴史ある港まちです。そんな港まちならではの、危機への立ち向かい方が必ずあると信じています。若い皆さんの力を頼りにしています。

港まちづくり協議会 会長
早川 勝利

もくじ

03 I.「み（ん）なとまちVISION BOOK」の背景について
- I.1 港まちづくり協議会とは
- I.2 み（ん）なとまちVISION BOOKとは
- I.3 み（ん）なとまちの発掘
- I.4 これまでの港まちづくり
- I.5 港まちづくりの新たな展開

13 II. ビジョン改訂のプロセス
- II.1 地域の声を聞く
- II.2 新たな視点と事例に学ぶ
- II.3 地域のみんなと考える

19 III. 9つのシナリオについて

20 ○ 暮らす｜LIVES
- シナリオ❶ 楽しく学び実践するみなとまちBOSAI
- シナリオ❷ 暮らしの豊かさを育むコミュニティ活動
- シナリオ❸ 港まちならではの空間の有効活用

24 △ 集う｜MEETS
- シナリオ❹ 地域の特色を活かしたにぎわいづくり
- シナリオ❺ アート&音楽を活用したまちづくり
- シナリオ❻ ガーデン埠頭と連携したエリアー帯のにぎわいづくり

28 □ 創る｜CREATES
- シナリオ❼ 港まち内外の人々をつなぐ情報発信
- シナリオ❽ 港まちに呼び込む新たな風
- シナリオ❾ 人づくりを軸にした協働まちづくり

MINNATOMACHI VISION BOOK 2019-2024

I.「み（ん）なとまちVISION BOOK」の背景について

ここでは、港まちづくり協議会の基本情報及び、
ビジョンの背景にある港まちの歴史的変遷をご紹介します。

I.1 港まちづくり協議会とは

港まちづくり協議会のはじまり

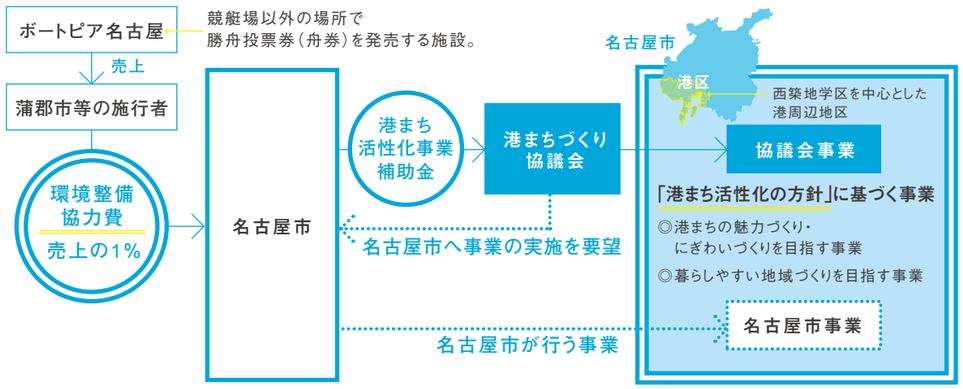
2006年（平成18）8月のボートピア名古屋の開設にともない、競艇を施工する自治体（蒲郡市等）から「環境整備協力費」（ボートピア名古屋の売上金の1%）が名古屋市に交付されることとなりました。これを原資とする団体として始まったのが、港まちづくり協議会です。

港まち活性化の方針と港まちづくり協議会の取り組み

港まちづくり協議会の始動に先立ち名古屋市が策定したのが「港まち活性化の方針」です。そこには、「西築地学区を中心とした港周辺地区」において、「ボートピア名古屋の開設をきっかけに市民と行政との協働による港まちのにぎわいづくり・地域づくりを目指す」ため、「港まちの魅力づくり・にぎわいづくりを目指す事業」と「暮らしやすい地域づくりを目指す事業」という2つの事業を検討・実施することが明記されています。

港まちづくり協議会では、この方針に基づき、地域の意向を取りまとめて名古屋市に事業の実施を要望するとともに、「港まち活性化事業補助金」を活用し、各種の協議会事業を行政との協働により企画及び実施しています。公金を原資とするこれらの取り組みには、常に公共事業として妥当性が求められています。

● 「環境整備協力費」を活用するまちづくり事業



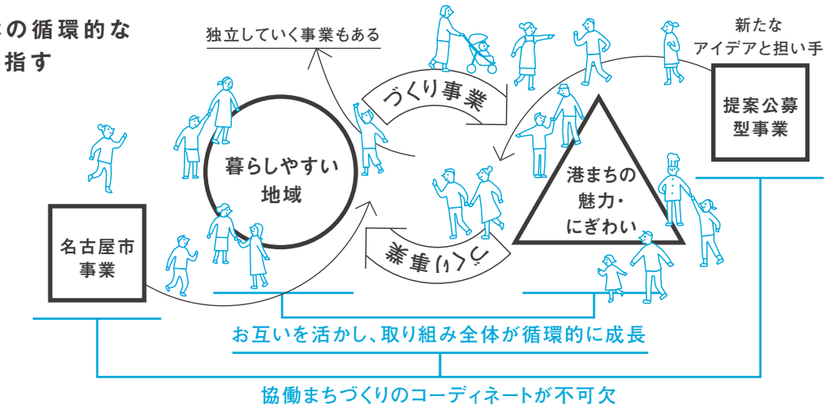
※港まちづくり協議会メンバーの構成については巻末に記載しています。

コンセプトを立ち上げビジョンを描く

2012年（平成24）度、港まちづくり協議会ではビジョン検討委員会を設置し、港まちづくりの新たな段階を目指すビジョンを作成しました。大切にしたかったのはそれまでに培ってきた地域住民や団体・NPO・事業者等のネットワークでした。それを活かすためには、人々の深い共感と信頼を軸にした協働のあり方を問い直す必要がありました。そこで、港まちの歴史的変遷を振り返りつつ、公共事業としてのまちづくりの循環的な成長をデザインし、「なごやのみ（ん）なとまち」というキャッチフレーズのコンセプトを定義化しました。そして、各種の専門家のサポートを得ながら「暮らす、集う、創る」の3つのテーマで構成されたビジョンを定式化しました。

I.2 み（ん）なとまちVISION BOOKとは

● 事業全体の循環的な成長を目指す

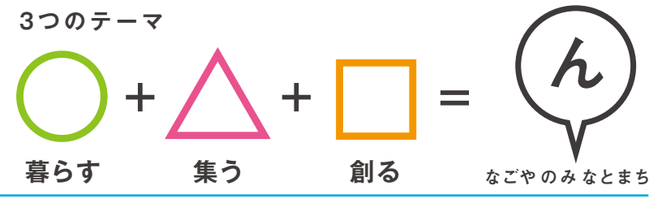


● コンセプトと方程式

『なごやのみ（ん）なとまち』

名古屋中のみんなと楽しめて、全国の皆さまに誇れる「みんなの港まち」を目指します。

事業に参画する
人々の数だけ
物語が生まれます。



I.3 み（ん）なとまちの発掘

「港まち」から生まれた「み（ん）なとまち」

「なごやのみ（ん）なとまち」は、「港まちづくり協議会って、いったい何をしているの?」とか、「港まちづくり協議会って、どんなことを目指しているの?」と質問されたときに、一言で答えられ、かつ全ての事業の基盤となるアイデアを表すキャッチフレーズとして、まちづくり活動の実践の中から誕生しました。それが、ビジョン検討委員会の中でも着目され、活動全体を包括するコンセプトとして「み（ん）なとまちVISION BOOK」の中に明確に位置づけられ、定義化されました。

● コンセプト

『なごやのみ（ん）なとまち』

名古屋中のみんなと楽しめて、
全国の皆さまに誇れる
「みんなの港まち」を目指します。

ぷらり港まち新聞のショルダーコピーとして使用されていた「なごやのみ（ん）なとまち」。

ビジョン検討委員会で「なごやのみ（ん）なとまち」がコンセプトに位置づけられた。

このようにして港まちづくり協議会の活動から見出され、ビジョンに位置づけられた「なごやのみ（ん）なとまち」でしたが、その考え方は、意外にもこの街の歴史文脈とも繋がりがあるということが、ビジョン検討委員会の中で明らかとなりました。

港まちづくり協議会が、2013年（平成25）3月に発刊した「み（ん）なとまちVISION BOOK」。10年を展望し、5年を目標年次としたまちづくりビジョン。

I.4 これまでの港まちづくり

「名古屋の港まち」は「みんなの港まち」だった

名古屋はモノづくり都市として知られていますが、名古屋港はその発展を支えてきた物流の拠点です。そして、その名古屋港の活力を支えてきた港まちが、現在の西築地学区を中心とした港周辺地区です。名古屋港の開港は、1907年（明治40）。仕事を求め、一旗揚げようとやってきた人々によって、埋立地には居住地が増え、区域と人口もどんどんと増えていきました。開港から8年後の1915年（大正4）には、西築地尋常小学校が誕生。以降、西築地学区は、名古屋港を支える港まちとして歩み始めます。

開港から40年にわたり港の発展に尽力した初代専任港務所長の奥田助七郎氏。

1906年（明治39）に奥田氏が巡航博覧会船「ろせった丸」を入港させて開港の契機をつくった。

1925年（大正14）頃。「築港」と呼ばれていた当時の様子。

1965年（昭和40）までの名古屋港には大型貨物船が頻繁に来港し、港運の艀（はしけ）や貨物列車、トラック等が活発に行き交ったため、港まちには様々な国の船員や荷役労働者が集まり、路面店は大繁盛、江川線には屋台が立ち並び街全体が大変なにぎわいでした。また異国情緒の漂う港まちからは、名古屋の中心部へとつながる路面電車も運行され、多くの人々が頻繁に利用していました。そこには、活気ある「名古屋の港まち」の原風景があったといえるでしょう。このようににぎやかだったかつての歴史をふり返ると、「名古屋の港まち」は「みんなの港まち」だったという認識が浮かび上がって来るのです。

名古屋港開港の出発点。127メートルあったという「鉄桟橋」。

名古屋港で働くたくさんの港湾労働者たち。大型貨物船が沖に係留され、艀（はしけ）が陸へと荷物を運び込む。

路面電車は、港湾関係者だけでなく多くの市民が利用した。

港まちの人々の暮らしを支えた築地公設市場の様子。

写真提供：名古屋港管理組合、港まちの皆さん

名古屋港にコンテナ船箱根丸の初入港1968年(昭和43)。

1978年(昭和53)。3つのふ頭に分かれていた頃の名古屋港。

解体されてゆく港まちの原風景、はじまる港まちづくり

しかし、その後、船舶の大型化や港湾機能の高度化が進み、1968年(昭和43)には金城ふ頭のコンテナ岸壁が開設、物流拠点が移動すると共に、港まちからは、港湾労働者の姿が消えてゆきました。やがて商業は停滞、人口流出が顕著となり、それまでの活力は急速に失われていったのです。このように産業構造の転換によって、港まちの原風景は急激に姿を変えてしまいました。風景から人が消えるということは、地域の絆という見えない人間関係が失われることでもありました。

そのような状況の中、「市民に親しまれる港づくり」が当地区の課題として認識されるようになります。1980年(昭和55)に当地区は、名古屋市が実施する「地区総合整備事業」に正式に位置づけられ、「築地地区総合整備事業」として、ウォーターフロント開発、公共施設整備、江川線整備、市街地再開発、密集地整備等のハード事業が順次行われていきました。

名古屋港で荷揚げされた荷物を計量する。

港まちを踊り巡る踊り子さん。みなと祭は今も昔も盛大に。

港へ着いた親戚を家族みんなでお出迎えする風景。

築地ポートタウン地区の協働まちづくり

上記のようなハードを中心とした再開発の流れに呼応して、西築地学区には、住民主体のまちづくり組織(※)が誕生し、ハードの面だけではないソフトの面からのまちづくり活動が展開されました。楽しい雰囲気の中で人々の合意を形成していくワークショップは、当時としては画期的な手法として注目されました。また、これらの地元まちづくり組織を基盤として、1991年(平成3)に、「築地ポートタウン計画」という行政計画が策定されました。これは当地区の将来像を明確にし、住民、企業、行政が共通の目標をもち、連携しながら港づくりを進めていくための指針として、名古屋市と名古屋港管理組合が共同で策定したものです。行政は、これに基づき、ガーデンふ頭における名古屋港水族館や名古屋港イタリア村の整備、土地利用転換の促進によるシートレインランドの開設など、さらなるハード事業を推進していったのです。

※「ポートタウン1号地街づくりの会」、「築地ポートタウン21まちづくりの会」「夢塾21」等の活躍があった。

写真提供:名古屋港管理組合、港まちの皆さん

このようにしてみると、「港まちづくり」は、行政の働きかけからスタートしながらも、住民主体のまちづくりを誘発し、ワークショップ等の新しい手法をいち早く汲み入れながら、ハードとソフトが一体となった先進的な取り組みを実施していたことがわかります。それらは、名古屋市の中でも先進的なまちづくりでした。

「築地ポートタウン計画」は、社会経済情勢の変化等を踏まえ、定期的な改訂が実施されており、最新版の計画においては、港まちづくり協議会も、同エリアのまちづくりを推進する担い手として明確に位置づけられています。しかしながら、予定していたハード事業は、概ね完了しており、現在は、それらを活用するソフトを中心としたマネジメントが問われる段階を迎えています。そして、このマネジメントこそが、極めて解決困難で重大な課題だといえます。人口が減少し、税収が少なくなる中で、公共事業に依存した再開発の手法は見直しが迫られているのです。これは、「築地ポートタウン計画」に限られた特別な課題ではなく、今日の都市計画全般が直面している根本的な課題といえるでしょう。

地域主体のワークショップで稲荷公園を再生。小学校体育館で遊具を検討するなどの本格的な取り組みは、当時の先進事例として注目された。

働く港から、市民に親しまれる港へ、移り変わっていく中のシンボリックな2つの建物、名古屋港ポートビルと名古屋港水族館の建設風景。

写真提供:名古屋港管理組合、港まちの皆さん

I.5 港まちづくりの新たな展開

2008年(平成20)当時の事業計画作成部会の様子。

2019年(令和1)現在の協議会の中心メンバーと事務局スタッフ。

旧文具店を再生した拠点スペース。「POTLUCK(ポットラック)」には、「あり合わせ/持ち寄りの料理」の意味がある。ポットラックを楽しむように、この街ならではの歴史や魅力に新たな視点を持って向き合い、創造的なまちづくりを展開していきたいという願いが込められている。

港まちづくり協議会の誕生

港まちづくり協議会は、ボートピア名古屋の開設をきっかけに2006年(平成18)8月に発足しました。公金を原資として、一定の資金と組織を確保した全国でも稀なまちづくり団体です。しかし、それ故に、港まちづくり協議会は、先駆的実験モデルとなる宿命を背負っているともいえるでしょう。

港まちづくり協議会では、毎月開催している会議に加え、毎年6月〜8月に開催する事業計画作成部会において、翌年度の事業内容を検討しています。事業計画作成部会には、協議会委員に加えて地域の中から公募する部会員も参加した意見交換をワークショップ形式で行なっています。

これからの時代の「み(ん)なとまち」

2013年(平成25)3月には、「み(ん)なとまちVISION BOOK」が発刊され、「なごやのみ(ん)なとまち」をコンセプトにした新たな活動もスタートしました。そして、2015年(平成27)には、まちづくりの拠点として港まちポットラックビルがオープン。「暮らす、集う、創る」をテーマに、防災、子育て、ガーデンプロジェクトなど、各種のコミュニティ事業、魅力・にぎわいづくり、アートプロジェクトや新聞発行等、様々な活動を展開してきました。

港まちは、そもそもこの界隈の人々にとっての「みんなの港まち」でした。その原風景は、時代の移り変わりの中で一度は解体されてしまいましたが、今こそ現代における「みんなの港まち」を創造していくことが求められています。鍵となるのは、新しいことに挑戦する創造的な人材と、それを受け入れていく寛容性です。「み(ん)なとまち」の「ん」は、「人」という字にも似ています。港まちに、いかにして創造的な人々を受け入れていけるのか。港まちづくり協議会は、「なごやのみ(ん)なとまち」を目指した活動をこれからも展開していきます。

み(ん)なとまちVISIONによる近年の活動紹介(2013-2018)

○ 暮らす | 心地よく安心な港まちで暮らす

地域の人々との防災訓練

「みなとまちBOSAI」として、学区、町内会、小学校、幼稚園などで地域のみなさんの防災訓練をお手伝いしました。

子育て、ガーデンプロジェクト、旧防潮壁の修景事業

「コミュニティ活動の推進事業」として、子育てサロンの運営、江川線にハーブガーデンを整備、西築地小学校の児童たちの卒業制作となる壁画づくり等を行いました。

港まち文庫事業

小学校、中学校、コミュニティセンター、トワイライトスクール、港まちポットラックビル等に「港まち文庫」を設置しています。

△ 集う | 魅力的でにぎやかな港まちに集う

地蔵盆まつり、名古屋みなとをどり

港まちで盛んな盆踊りや伝統芸能を楽しみながら多世代交流の場づくりをしました。

みなとイルミナート

江川線の樹木にイルミネーションが彩られる時期に手づくり装飾を施したイベントや地域の魅力を活かしたマーケットやライブを開催しました。

港まちお店マップ&みなと A GOGO!(港まちを巡るミニツアー企画)

掲載許可をいただいた港まちのお店を紹介するお店マップを作成し、ホームページとも連動。また港まちのヒト・モノ・コトを巡るちょっとディープなミニツアーを企画しました。

写真提供：アッセンブリッジ・ナゴヤ実行委員会（下段2点）

創る｜みんなと港まちを創る

提案公募型事業

港まちづくりに向けての新たなアイデアを発掘し、事業の担い手となる人材を育てる事業を実施しました。

港まちポットラックビルの活用（展覧会、スクール、ワークショップ）

港まちポットラックビルにおいて、全国のまちづくりやアートプロジェクトの現場の実践者をゲストに招くポットラックスクールや、2階（プロジェクトスペース）、3階（エキシビションスペース）を活用した展示やイベントを開催しました。

空き家活用

空き店舗だった旧ボタン店を改装し、アート作品を展示するギャラリーとして活用しました。

ポットラック新聞、かわら版

「港まちの内外の人が繋がる新聞」を目指して、全国に届けるタブロイド版と港まち限定で配布しているかわら版の2つの新聞を発行しました。

名古屋市要望事業

地域課題を整理して、名古屋市が実施する事業を要望しています。みなと祭の警備に関する補助金の増額、江川線樹木の維持管理、アッセンブリッジ・ナゴヤの開催等が実現しました。

PICK-UP　音楽とアート、動き出す風景。
— アッセンブリッジ・ナゴヤ —

名古屋の港まちを舞台にした音楽と現代美術のフェスティバルとして、2016年（平成28）よりスタートしました。音楽やアートが架け橋となり、まちと人が出会い、つながりが生まれ、新たな文化が育まれていくことを目指しています。港まちづくり協議会は実行委員会のメンバーとして、各種プログラムにおける地域との橋渡し役をしました。

｜音 楽｜港まちのお店や施設などでの多彩なコンサート、アーティストがまちに滞在するレジデンスプログラムなどを開催しています。

｜アート｜「パノラマ庭園」というタイトルのもと、港まちを「庭」に見立て、作庭するようにアーティストが街に様々なアートプロジェクトを展開しています。

MINNATOMACHI VISION BOOK 2019-2024

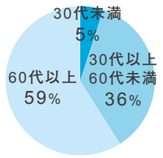
Ⅱ. ビジョン改訂のプロセス

「み(ん)なとまちVISION BOOK」の目標年次だった
2018年度（平成30）に、ビジョン検討委員会を再設置し、
およそ1年をかけて過去5年間の活動を精査、今後の展望を検討しました。

Ⅱ.1 地域の声を聞く

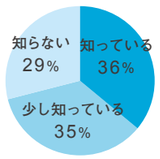
529人の地域の声

回答者年齢層



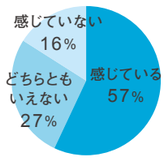
6割が60代以上、6:4で女性が多かった

港まちづくり協議会を知っていますか?



3割に知られていない

港まちに愛着を持っていますか?



6割が愛着や誇りを感じている

港まちのどんなところが好きですか?

みなと祭・地蔵盆まつり　54人
一体感・団結力がある、下町の良さを感じる、他地区に誇れる

交通の便が良い　43人
地下鉄、バスなどの交通の便が良い

名古屋港がある　43人
ガーデン埠頭がある、港の風景が好き

名古屋港水族館がある　33人
水族館が近く、週末は活気がある

近所づきあい、住民同士の関係が良い　29人
学区がまとまっている、協力的な人が多い、近所づきあいがあり助け合いがある

住民の人柄　29人
親しみがある、人情深い、明るく世話好き、役員さんが頑張っている、古くからの住人が温かい

これからの港まちづくりを考える住民意向調査

2018年（平成30）の2月に、ビジョン改訂の事前調査としてアンケートを実施しました。アンケートは回覧板を通じて西築地学区の全世帯に配布、309世帯529人（対世帯比で18%）の方に回答いただきました。港まちづくり協議会については、「よく知っている」「概ね知っている」で36%（188人）に対し、「ほとんど知らない」「全く知らない」と回答された方も29%（152人）いらっしゃいました。私たちの活動が、まだまだ認知されていないと反省する一方で、港まちづくり協議会の発行する、「ポットラック新聞（旧・ぶらり港まち新聞）」や「かわら版」をご存知の方は61%（324人）とあり、それと認知されないままにも、私たちの発信する情報が届いている手応えもありました。また、今回のアンケートに応えていただいた年齢層の方々には知られていませんでしたが、インターネットやSNSを通した情報発信は、認知普及のためにも引き続き重要と考えます。

また、港まち（西築地学区）への愛着については、「感じている」「多少感じている」と回答された方は全体の57%（290人）と6割近くの数になりました。港まちの魅力的な点については、「みなと祭、地蔵盆まつり」と地域のお祭りを挙げた方が最も多く、次いで「交通の便が良い」「名古屋港がある」と続きます。「近所づきあいや住民同士の関係が良い」「住民の人柄」など港まちの気質を魅力的な点として挙げられた方も多くいらっしゃいました。

一方、魅力的でない点については「商店・商店街に活気がない」「街に活気がない」という指摘が多かったです。

アンケートは、主流の量的調査であり、貴重な意見を集めることができました。しかし、回収率は、世帯比においても2割弱にとどまり、人々の声を集めるという意味では課題を残しています。今回は、港まちづくり協議会の全体像を理解していただくことを目的に、協議会とその活動をわかりやすく伝えるためのパンフレットも同封しました。しかし、簡潔に整理しても、A2サイズの両面を埋める情報量があり、その全てを理解し評価に応えることには限界もあったといえるでしょう。そこで、質的調査として町内会単位の対面式調査を、次のようなワークショップ形式で実施しました。

町内会単位のワークショップ

2018年（平成30）の7月から町内会単位で計14回行ったワークショップでは、①住民意向調査の結果を紹介し課題を共有、さらには②港まちのこれからについて参加者の皆さんと議論し、忌憚のないご意見をいただきました。港まちに暮らし、普段より地域の町内会活動に関わる方々との膝詰めの対話は、大変貴重な場となりました。

浮かび上がってきた10の関心

住民意向調査と町内会ワークショップの2つの取り組みから、港まちの人々の10の関心が見えてきました。

① 防災・減災の取り組み
町内会単位での防災訓練、避難経路の確認、災害への備え

② 世代・多文化交流
多世代交流、旧住民と新住民の交流、外国人など異文化交流

③ 築地口商店街の活性化
商店街、築地公設市場の活性化、買い物難民が生じないための取り組み

④ 江川線の環境整備
江川線の路上駐車の社会実験、回遊のための環境整備

⑤ 名古屋港・ガーデンふ頭の魅力づくり
名古屋港の魅力づくり、魅力発信

⑥ まちのにぎわいづくり
港まちの魅力発信、まちを回遊するイベントや仕組みづくり

⑦ 空き家・空き店舗対策
空き家のリノベーション、新しい活用の模索

⑧ 地域の文化・伝統の継承と活性化
みなと祭、地蔵盆まつり、踊りや太鼓の文化の継承と活性化

⑨ 地域の担い手づくり
町内会活動をはじめとする、まちの担い手の育成、協働の仕組みづくり

⑩ その他
広報、港まちポットラックビルの活用

協議会の活動をご理解いただく機会にもなった。

単身者や外国人との関係づくりに悩む声もあった。

毎回の議論は見える化を図り参加者の声を共有した。

アンケートに関連して協議会活動をわかりやすく伝えるためのパンフレットも作成した。

Ⅱ.2 新たな視点と事例に学ぶ

港まちのこれからを考える地域の声を題材にしたワークショップ形式の会議をくり返し行った。

池田哲也さん

稲葉久之さん

（一社）地域問題研究所の池田哲也さん、フリーランスファシリテーターの稲葉久之さんにプロセスを支援いただきました。

有識者会議

有識者として前回のビジョン検討委員会にもご参加いただいた日本福祉大学の吉村輝彦教授を迎え、港まちの人々の中から浮かび上がってきた10の関心を中心に、協議会の地元委員（西築地学区連絡協議会推薦）の皆さんとの議論の場を設けました。
吉村教授からは、それらのプロセスの中で、以下の4つの視点が提示されました。

日本福祉大・吉村教授の4つの視点

日本福祉大学の吉村教授。地域に寄り添いながらその先を行く視点を指し示してくれました。

1 新しいにぎわい、新しい街の姿の創造
少子高齢化や外国人の増加など社会情勢の変化も鑑み、「過去のにぎわいを取り戻す」という発想ではなく、「新しいにぎわい、街の姿を創っていく」発想が必要です。

2 日常の暮らしのにぎわい
非日常のにぎわいづくりとともに、現在の暮らしぶりにあった日常のにぎわいづくりを考えましょう。

3 アートで街を再発見
アートや音楽に触れることを通してまちの新たな一面を発見するような機会としましょう。

4 新しい人を呼ぶ雰囲気づくり
新しい世代、新しい担い手の発掘を行いましょう。新しい風を呼び込む雰囲気づくりも大切です。

2つの先進事例に学ぶ

空き家・空き店舗を資源として活用し、新たなにぎわい、新たな街の姿を創造していくために、近年の名古屋市の中で注目される2つの地域の事例に学びました。

円頓寺商店街からの学び

▷ 新しい人材を受け入れるための対話
大学生や他所者や若手が結成したグループと地元が交わって、お互いを理解するための対話を積極的に進めた。

▷ 具体的な提案
空き物件オーナーへの交渉を「ニーズ聞き取り型」から、具体的な「メニュー提案型」に切り替えることで成功。

▷ 新たなにぎわいの創出
伝統文化と新しい発想・人材を融合した円頓寺パリ祭を開催。

▷ 既存店舗との連携
新しい取り組みは、既存の店舗に丁寧に説明し、連携しながら実施することを大切にしている。

▷ 商店街の売上アップ
新規参入のイベントでも、地元の商店街店舗の売上につながる工夫があることで、取り組みが継続。

長者町からの学び

▷ 新しい人を受け入れて停滞から脱却
「住む人」「働く人」「遊びに来る人」が増加し開かれたまちに生まれ変わろうとしている。

▷ イベントを通して人を育てる
地域で活躍できる舞台を提供することで、地域の担い手を育てている。黒字で継続性を担保することも大切。

▷ まちづくりの視点でアートを受け入れる
まちづくりの文脈の中で、まちとNPOが組んでアートを武器として活用した。若い人材やアーティストが入り、担い手の多様化が進んだ。反対者を含めて多様な意見に触れ、違いに気づき乗り越えることで、まちの「多様性」と「魅力」を高めることができた。

近年の名古屋では、抜群の知名度を誇る円頓寺商店街。しかし、背景には20年以上前からの地道な活動がある。古い街並みを残しながら、リノベーションで新たな参入者が増え続けている。

活動を牽引する（株）ナゴノダナバンク代表の市原正人さん（右）、コーディネーターの藤田まやさん（左）

長者町はかつては日本三大繊維問屋のひとつと言われた歴史を持つ。あいちトリエンナーレの街中会場となったことをきっかけにアートを活用したまちの活性化を実現した。

まちづくりを進める（株）錦二丁目エリアマネジメント代表の名畑恵さん（右）、錦二丁目まちづくり協議会会長の堀田勝彦さん（左）

Ⅱ.3 地域のみんなと考える

「み（ん）なとまちでなにする?」展
日時｜2019.1.26（土）～3.16（土）
会場｜港まちポットラックビル2階
内容｜ビジョン改訂過程の展示、
　　トーク、ワークショップ等
来場者数｜1,329名

「み（ん）なとまちでなにする？」展

港まちづくり協議会の活動とそのビジョン改訂のプロセスを公開、その内容を世に問いながら、皆さんのご意見を募集しました。また共感の広がりを目指し、「“港まちのこれから”のビジョンにあなたも一緒に関わりませんか?」というメッセージを込めてワークショップやゲストを招いたトークイベントも開催しました。ビジョンは、未来を描く仮説ですが、本展は、それをインスタレーション（仮設）という形で表現する試みでもあったと言えるでしょう。

ビジョン改訂プロセスの最終ピリオドとなった有識者会議は、展示会場の中で開催された。およそ1年に渡るプロジェクトの成果に取り囲まれる中、出席者全員でその内容を改めて振り返り、白熱した議論が交わされた。

港まちの歴史から過去十数年間の協議会活動を振り返った。また活動を彩った広報媒体や、他地域のまちづくりビジョンや報告書も展示した。

ビジョン改訂プロセスの中で、ご意見を伺ったたくさんの港まちの人たちの声をビジュアライズし、「み（ん）なとまち」のビジョンの検討プロセスを表現した。

名古屋芸術大学の学生たちが、「港まちらしさ」を視覚的に表現した作品も展示した。

新たな9つのシナリオ案を展示しパブリックコメントを募集した。

みなとまち空き家プロジェクトの学生による750分の1の港まち模型を展示した。

MINNATOMACHI VISION BOOK 2019-2024

Ⅲ. 9つのシナリオについて

これまでのビジョン改訂プロセスをふまえて、新たな9つのシナリオを描きました。

| 暮らしやすい地域 |

○ 暮らす
LIVES

心地よく安心な港まちで「暮らす」

一人ひとりの関心を大切に、
港まちの日常的な暮らしを心地よくしていくことで、
みんなが安心できる港まちを目指します。

東日本大震災以降、防災・減災は日本中の人々の関心事となりました。海に面する港まちでは、高潮・津波・液状化など、この地域特有の事態への対策を講じる必要があります。また、発災時には、自助に加えて共助が求められるため、地域内の日常的なコミュニケーションが大切とされています。またさらに、日常的な暮らしや地域への愛着を育むことが、災害復興の推進力になるとも言われています。
そこで、港まちづくり協議会では、このような災害に対応する取り組みとして、防災・減災を楽しく学び実践する事業を推進し、あわせて各種のコミュニティ活動を支援し、地域におけるコミュニケーションの活性化を目指します。また、地域の中の様々な場所や空間に着目し、有効活用する取り組みを通して、港まちへの愛着を育みます。港まちに関わる一人ひとりの関心を大切にして、港まちの日常的な暮らしを心地よくしていくことで、みんなが安心できる港まちを目指します。

シナリオ❶ 楽しく学び実践するみなとまちBOSAI
シナリオ❷ 暮らしの豊かさを育むコミュニティ活動
シナリオ❸ 港まちならではの空間の有効活用

シナリオ❶

楽しく学び実践するみなとまちBOSAI

港まちでは、高潮・津波・液状化といった地域特有の事態への対応だけでなく、観光やビジネス等を目的とした多くの来訪者への対応も考慮しなければなりません。また、この地域が体験してきた伊勢湾台風などの過去の災害、それを乗り越えてきた地域の知恵にも学ぶことが大切だと考えます。防災の専門家や実際に被災地で活動されている方々にもアドバイスをいただきながら、楽しく学び実践する防災活動の総称を「みなとまちBOSAI」とし、一人ひとりの心構えを育んでいきます。

みんなとまちでなにする？

- 町内会や学区を単位とした訓練が継続的に実施できるようにサポートします。
- 「トイレ」「家具固定」等、テーマを絞った取り組みをします。
- 教育機関、周辺企業と連携した津波避難訓練、AED実習に取り組みます。
- 伊勢湾台風等の災害体験を記録し、次世代に引き継ぐ取り組みを実施します。
- 「港まちカルタ」等を用いた楽しく学べる取り組みを実施します。
- 防災・減災まちづくりに関する先進地区を目指し、関連する様々な情報の発信に努めます。また、この地域の昼間人口の多くを占める企業との連携も検討していきます。

シナリオ❷

暮らしの豊かさを育むコミュニティ活動

港まちの中には、和踊りや伝統芸能、アート、音楽といった文化的なコミュニティ活動が盛んです。また、子育てや高齢者支援などのテーマ型のコミュニティ活動も活発です。地域の中の日常的なコミュニケーションを活性化するために、各種のコミュニティ活動と協働し、多くの人々が楽しく関わり、つながりあえるような場づくりを広げていきます。一人ひとりの関心を大切に、港まちの日常を豊かで心地よいものにしていきます。

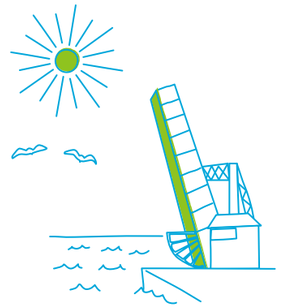
みんなとまちでなにする？

- 子育て世代やシニア世代等が集まれるサロンづくりを支援します。
- 多世代・多文化交流を推進します。
- 新旧住民が知り合えるきっかけづくりを目指します。
- コミュニティ活動と協働して、「子育てするなら港まち!」と考える家族が増えることを目指します。
- 踊りやアート等の文化的なテーマを中心にしたコミュニティ活動と協働をして、文化を楽しく学べる風土づくりに貢献します。
- 江川線等でガーデニングを進めるコミュニティ活動と協働し、交流の場づくりを行います。
- 他にも、各種のテーマを掲げる公共的なコミュニティ活動に対して協働を検討していきます。

シナリオ❸

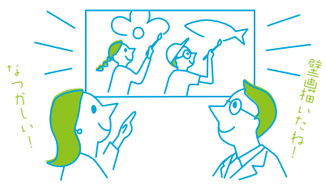
港まちならではの空間の有効活用

港まちのメインストリートである江川線は、電柱が地中化されているため、大きな空が望める気持ちのいい空間が広がっています。また、海に面する水辺空間には、港まちならではの潮風が漂う施設があります。観光、ビジネス、商店、住宅といった別々の機能を持った建物が混在する雑多な風景も他にはない特徴と言えます。それらの空間の価値を再考し、より心地よい環境となるように整備する、あるいは有効に活用していくことが重要です。これらを地域の資源として活かしていく方法を探ります。



みんなとまちでなにする？

- 水辺空間の施設等の有効活用を図り、港まちの皆さんやビジネスパーソンが、心地よく過ごせるような空間として改善していくことを検討します。
- 港まちの拠点に設置された港まち文庫を有効活用し、まちのお気に入りスポット等でも読書の時間が楽しめるようにします。
- 旧・防潮壁を活用し、西築地小学校の児童が壁画を描くプロジェクトを推進します。
- 築地口商店街やコミュニティ道路を活用した定期市やイベントの開催を目指します。
- 港まちのお店を紹介するお店マップを作成する等、地元商店の利用を促進していきます。



| 港まちの魅力・にぎわい |

△ 集う
MEETS

魅力的でにぎやかな港まちに「集う」

港まちに集うみんなの力をあわせ、
港まちならではの魅力を活かした
にぎわいづくりを目指します。

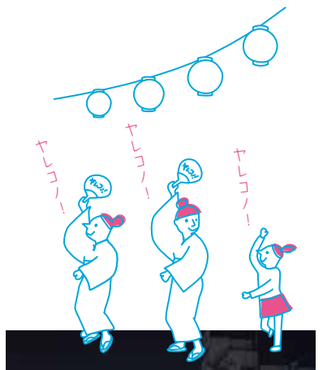
港まちでは、みなと祭をはじめとした伝統行事を地域の人々が独自に盛り上げてきました。それらの魅力的な風土や、地域の特色ある行事を活かし、地域の皆さんと一緒に進める魅力・にぎわいづくりを目指します。
名古屋港周辺には、観光客やビジネス等を目的とした多くの来訪者がいます。また、近年では、アッセンブリッジ・ナゴヤや花火等の新たなイベントへの来訪者も増えています。そうした来訪者に、港まちの様々な魅力を紹介し、街のファンを育てることも大切です。そもそも「名古屋の港まち」の原風景は、地域外からの数多くの人々を呼び込むことで生まれたものでした。現在の港まちに集う人々と共に、新たな魅力・にぎわいづくりを目指していきます。

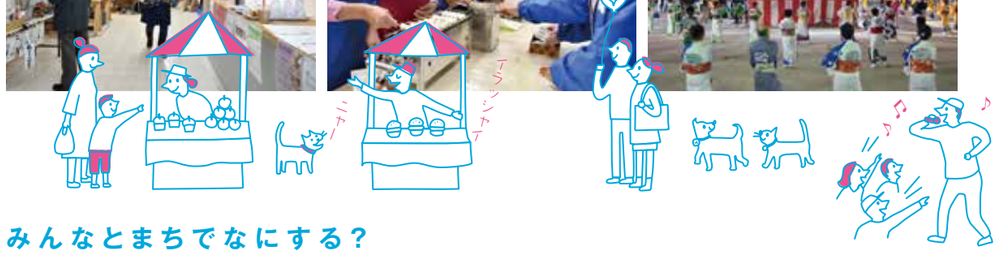
シナリオ❹ 地域の特色を活かしたにぎわいづくり
シナリオ❺ アート&音楽を活用したまちづくり
シナリオ❻ ガーデン埠頭と連携したエリアー帯のにぎわいづくり

シナリオ❹

地域の特色を活かしたにぎわいづくり

港まちの特色ある催事を大切にして、その持続的発展に役立つサポートを検討していきます。地域の人々のさらなる参画を促すことはもちろんのこと、そこに集う人々同士の交流を活性化し、新たなネットワークへとつなげていきます。そのためには、地域外の人々、団体・NPO・事業者等の参入も積極的に促していきます。地域内外の人々がこうしたイベントの運営を担っていくことは、お互いに知り合う素晴らしい機会にもなるでしょう。このような交流を通して、地域に根づいた魅力的なにぎわいづくりを目指します。





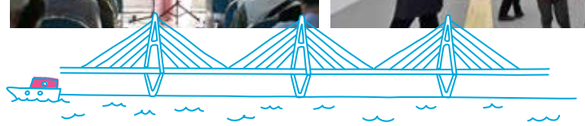
みんなとまちでなにする？

- 地元主体の地域イベントと連携し、港まちならではの魅力づくりに貢献します。
- 港まちで行われてきた既存イベント（地蔵盆まつり、みなと祭前夜祭、セーラーズマーケット等）と連携し、ポットラックバザールなどの新たなイベントを実施します。
- みなと祭に、地域外からの参加者を迎える取り組みを実施し、みなと祭に新たな活力を呼び込みます。
- 港まちのヒト・モノ・コトを取り上げた着地型観光イベント「みなとAGOGO!」を開催します。
- 円頓寺商店街「パリ祭」等を参考に、「商店街」という枠組みを超えた築地口エリアのにぎわいを創出します。

シナリオ❺

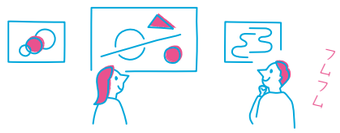
アート＆音楽を活用したまちづくり

港まちでは、時代に先駆けて、倉庫や街中の空き物件等を活用したデザインやアートのイベントが盛んに行われてきた歴史があります。そうした歴史に学び、アートさらには音楽といった文化的な取り組みやその創造性を、これからの港まちづくりの中にも積極的に取り入れていきます。2016年より始まった音楽とアートの祭典であるアッセンブリッジ・ナゴヤには、毎年多くの人々が訪れるようになっており、地域にも徐々に浸透しつつあります。芸術文化に親しむことをきっかけに、地域の中で、多様な人々を受け入れる寛容性を育むことができれば、より多くの人々を呼び寄せることができるようになるでしょう。



みんなとまちでなにする？

- アッセンブリッジ・ナゴヤと連携し、まちなかを会場にしたアートや音楽のイベントを開催します。
- アートや音楽を活用し、まちなかのにぎわいを創出するきっかけづくりを試みます。
- アーティストを港まちに受け入れて、滞在制作や交流イベントを企画します。
- 港まちポットラックビルの3階を中心に、街中の空き店舗等を活用したギャラリーを運営します。

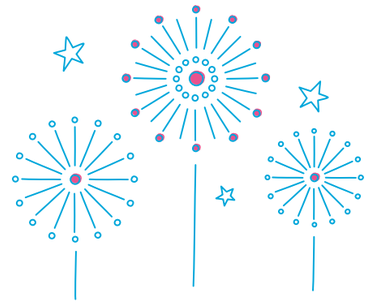


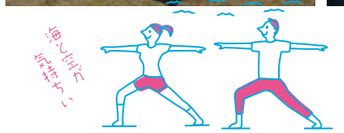
写真提供：アッセンブリッジ・ナゴヤ実行委員会（上段左・下段）

シナリオ❻

ガーデン埠頭と連携したエリア一帯のにぎわいづくり

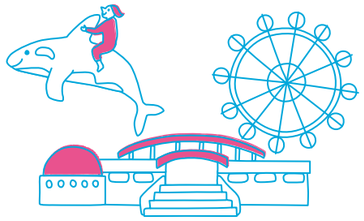
ガーデンふ頭には、名古屋港水族館をはじめとした魅力的な観光施設が多数存在しています。しかし、それだけでなく街区も含めたエリア一帯で考えると、海・空・風といった自然、港湾産業にまつわる歴史遺産、都市計画デザインと下町の雰囲気が重なり合う街並み等、魅力的な風景が浮かび上がってきます。ガーデンふ頭を訪れる人々には、そうしたこのエリア一帯の魅力を紹介し、全体を回遊し楽しんでいただける取り組みを検討していきます。市民や専門家等々の多様な意見を参考にして、エリア一帯のにぎわいづくりを目指します。





みんなとまちでなにする？

- 名古屋港水族館、名古屋港ポートビル、名古屋海洋博物館などの観光施設と連携したにぎわいづくり事業を展開します。
- 花火大会、クリスマスイルミネーションなど、ガーデンふ頭で開催されるイベントと連携を試みます。
- ウォーキングイベント、水族館南側緑地でのヨガ教室等、ガーデンふ頭の空間を活かした取り組みを検討します。



写真提供：名古屋港管理組合（上段左）、アッセンブリッジ・ナゴヤ実行委員会（上段右）

| 協働まちづくり |

□ 創る
CREATES

みんなと港まちを「創る」

「なごやのみ（ん）なとまち」のコンセプトを軸にして、
人々の共感と信頼を育みながら、
みんなと一緒に取り組む協働まちづくりを目指します。

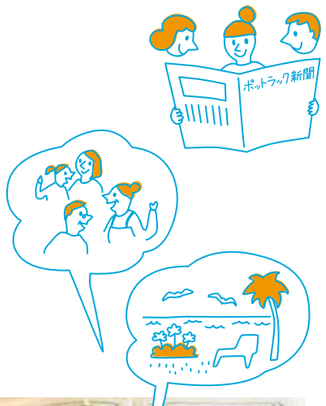
「なごやのみ（ん）なとまち」を目指すまちづくりの3つ目のテーマは「創る」です。港まちづくり協議会の拠点の名称は、「あり合わせ・持ち寄りの料理」を意味する「ポットラック」を、「今ある資源を活かし、場所や時間を共有し楽しむ」等の人間の創造的営為と解釈して、「Minatomachi POTLUCK BUILDING:港まちポットラックビル」と名付けました。港まちポットラックビルは、人々が互いの知恵や課題を持ち寄り、学びあいながら、創造的な解決を目指します。
まちづくりの中に、多様な職能を持った人々の創造的思考：creative thinkingを積極的に取り入れ、それらをかけ合わせることは、人や土地の潜在的な可能性を引き出し、まちへの気づきや新たな魅力を見いだすきっかけを与えてくれるでしょう。

シナリオ❼ 港まち内外の人々をつなぐ情報発信
シナリオ❽ 港まちに呼び込む新たな風
シナリオ❾ 人づくりを軸にした協働まちづくり

シナリオ❼

港まち内外の人々をつなぐ情報発信

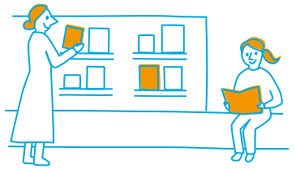
毎月発行するニュースレター、年間の活動をまとめた報告書、WEBやSNS、そしてポットラック新聞、かわら版等、様々な種類の広報媒体を使った情報発信をしています。港まちでの活動を、より多くの方に知っていただくことが大切ですが、この地域の皆さんに知っていただくことも重要です。そして、さらには、これらの情報発信を通して「地域内外の人々をつなぐ」ことが大きな目標でもあります。外からの視点で、街を見ると、今まで気がついていなかった魅力に出会い誇らしく思える。そんな小さな視点の交換を大切にしていきます。



みんなとまちでなにする？

- ポットラック新聞、かわら版の継続発行をしていきます。
- WEBやSNS、ニュースレターのポスティングに加えて、新聞折込等も織り交ぜながら多様な情報発信を行います。
- 港まちの皆さんや、その風景をテーマにした映像、画像等を活かし魅力的な情報発信にチャレンジします。

お祭りスゴイね
メモメモ…



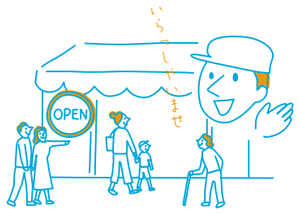
シナリオ❽

港まちに呼び込む新たな風

「なごやのみ（ん）なとまち」の活動に関わりたい!参加したい!というアイデアや企画をもった担い手の参入を促進し、新たな風を呼び込む機会として、提案公募型事業を実施します。また、港まちの魅力的な空き店舗、空き物件を有効活用するために、それらを活かして新たな事業に挑戦する人々を積極的に受け入れていきます。みんなと一緒になってまちづくりを進めていくアイデアやその実践を、新たな「港まちづくり」の取り組みとしてブランディングしていきます。

みんなとまちでなにする？

- 提案公募型事業を、港まちづくり協議会との協働の入り口として展開すると同時に、港まちづくり協議会そのものを広く周知するための広報の機会としても積極的に活用します。
- 課題やテーマを明確に提示し、その解決策やテーマに沿った提案を募集します。
- 空き店舗、空き物件を活用し、どのような事業が展開されることが望ましいのかについての地域のニーズを探り、専門家等のアドバイスを取り入れながら、事業者に向けて発信していきます。
- 築地公設市場等の公共空間を有効活用し、地域を活性化する事業を誘致、支援していきます。
- 不動産事業者等とも連携し、空き物件と入居希望の橋渡しを図り、魅力的な空き物件活用を促進します。



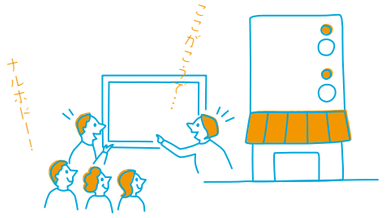
シナリオ❾

人づくりを軸にした協働まちづくり

街の底力や基礎体力となる人づくりを大切にしていきます。港まちの各種の地域活動についても、行事の計画づくりや会議、PR等をサポートし、地域活動の自主的で継続的な運営を支援します。「み（ん）なとまちVISION BOOK」に描かれたテーマやシナリオを踏まえた、新たな「港まちづくり」を推進していくため、市民と行政の協働を人づくりを軸にして促進していきます。

みんなとまちでなにする？

- 様々な担い手と協働をしながら、ビジョンに基づく新たな「港まちづくり」を促進し、その調整と進行管理を行います。また、地域の意向を取りまとめ、ビジョンとの整合性を図りながら、名古屋市に要望する事業を調整します。
- 港まちの皆さんや来訪者の声を集め、まちづくり事業に活かしていきます。
- 協働まちづくりのためのスキルアップ研修を行います。
- 港まちポットラックビルを活用し、人々の交流拠点とします。



おわりに

港まちづくり協議会が、中長期計画として作成した「み（ん）なとまちVISION BOOK」を世に送り出してから、早くも5年の歳月が流れました。「で、街は変わったの？」と聞かれると、「いや、まぁそんなに簡単には…。」なかなかカッコいいことは言えるものではありません。でも、少なくとも私たちの奮闘は、今日、今この瞬間も続いていて、気づけば、この街で本当にたくさんの方々と知り合い、率直なご意見や叱咤激励をいただけるようになってきました。私たちは、この「多様なつながり」こそが豊かさであり、これからのまちづくりの土壌になると感じています。そして、この培ってきた「多様なつながり」を活かすために、今後は、より多くの新しい風をこの街に呼び込み、受け入れていく必要があると考えています。

「みなとまち」に「ん」を入れると「み（ん）なとまちになる」。このジョーク混じりのキャッチフレーズが、港まちづくり協議会の活動コンセプトです。この「ん」は、即ち新しい人々を指します。何らかの決意を持って、この街に関わろうとする一人ひとりの存在こそが肝心で、そうした人々を迎え入れていく具体的な行動が、「なごやのみ（ん）なとまち」を実現させていきます。

今回のビジョン改訂に当たっては、港まちづくり協議会の十数年間に及ぶ活動を振り返りつつ、この街の皆さんの声を紡ぎながら、これからの展望を描きました。ご覧いただき、自分を活かして地域に関わりたい、人に役立つ仕事をしてみたい、港まちづくりに何か関わってみたい、という考えを抱いた方は、ぜひお問い合わせください。ご一緒できる日が来ることを心待ちにしております。

港まちづくり協議会

港まちづくり協議会メンバー

※令和元年11月現在、敬称略
　○印はビジョン検討委員会にも出席しているメンバー

会長	早川 勝利（西築地学区連絡協議会推薦）○
副会長	水谷 光貴（築地口商店街振興組合推薦）
	下村 卓也（名古屋市港区役所区政部長）
委員	河田 正巳（西築地学区連絡協議会推薦）○
	鵜飼 茂彦（西築地学区連絡協議会推薦）○
	安井 宗敬（西築地学区連絡協議会推薦）○
	松本 一男（西築地学区連絡協議会推薦）○
	大口 靖夫（西築地学区連絡協議会推薦）○
	舘　雄聡（名古屋市総務局総合調整部総合調整室長）
	宮島 葉子（名古屋市市民経済局地域振興部地域振興課長）
	花田 彰紀（名古屋市住宅都市局都市整備部名港開発振興課主幹［金城ふ頭開発］）
	箕浦 慎治（名古屋市緑政土木局港土木事務所長）
事務局	木村　仁（名古屋市港区役所区政部企画経理室長・港まちづくり協議会 事務局長）
	古橋 敬一（港まちづくり協議会 事務局次長）○
	岡西 康太（港まちづくり協議会 事務局主任）○
	児玉 美香（港まちづくり協議会 事務局主任）○
	森　希（港まちづくり協議会 事務局員）
	大西 未来（港まちづくり協議会 事務局員）

ビジョン検討委員会構成委員

※役割別で50音順、敬称略

有識者	吉村 輝彦（日本福祉大学教授）
ファシリテーション	池田 哲也（一般社団法人 地域問題研究所）
	稲葉 久之（フリーランス・ファシリテーター）

み（ん）なとまちVISION BOOK 2019-2024

MINNATOMACHI VISION BOOK 2019-2024

制作	港まちづくり協議会
企画・編集	古橋 敬一、岡西 康太
デザイン	株式会社クーグート
写真	岩田 隼之介（p11／5段目）、江本 典隆（p12／1段目）
	岡村 靖子（p10／下、p11／6段目、p12／2段目、p23／上段中・右）
	城戸　保（p18／中・下段）、冨田 了平（p12／4段目）、藤井 昌美（p12／3段目）
印刷・製本	株式会社石田大成社
発行	港まちづくり協議会
	2019年11月